

この人々の行方は？

大村 恵美子

昨 2000 年秋、南独・オーバーアマガウの受難劇鑑賞とタイアップして企画されたイスラエル聖地巡行に、合唱団員数名も参加し、折りしも険悪化した中東情勢に、彼らが帰国するまで、東京にいて毎日一喜一憂したものだ。さいわい行程の変更を余儀なくされながらも、無事に一行は帰国したが、それ以来、今では観光旅行など考えられないほど、わずか 1 年のうちに、破局的なイスラエル・パレスチナの対立は顕在化してしまった。

私たちは、合唱団創立以来、毎年 12 月には、バッハの「クリスマス・オラトリオ」を上演して、歌に織り込まれたナザレ、ベツレヘム、イエエルサレム等の、イエス生誕にまつわる地名にも親しんできた。キリスト生誕の物語は、単に古代の一物語ではなく、現

実に世界中の熱い火種となっている土地と民族とに直結し、古くからのユダヤ教、キリスト教、イスラム教等の宗教に秘められた神から人類へのメッセージを、今に生きるわれわれ人間が読み解かねばならない、重大な契機を提供してくれる。

しかし、私たちには解決が見つからない。山ほど試みられる対立勢力間の合意は、つぎつぎと破られ、人の疲弊と土地の荒廃ばかりが、うず高く積み上げられてゆく。

この写真の人々の平安は、またイスラエルの人々の平安は、どこから生まれるのだろうか。繁栄のイエエルサレム神殿が廃墟となり、人々の間に、人々の

中に、それとはまったく別次元の神の住み処が築かれ、すべてが新しくなる、いや、すでになっている、という力強い神の福音は、地に住むわれわれすべてに宣べ伝えられたのではなかったか。

神の寵愛の真偽をたがいに競い、そのために他人の生活を奪い、自由を奪い、生命を奪って、自分た

ちだけどこへ辿りつこうとするのか。まずは、世界各地で、その土地に生きる人間に、具体的な生を保証するよう、すべての加害を止めること。解決はそれに尽きるのだ。地上の、ある特定の人々のみを偏愛する神など、神ではない。この直視に徹することだ。

私たちは、バッハの「クリスマス・オラトリオ」を、地にある隅々にいたるすべての人間のために歌う。この写真



の人々のためにも。

◇

これを書いた 2 日後に、アメリカ国内数カ所で多発爆破事件が起きた。今後の展開は予測がつかない。「地には平和」を祈るのみ。

号数の訂正…………… 2000 年 3 月発行の 452 号は、正しくは 453 号とすべきでした。以下順に号数を繰り下げ、今月号は 472 号となります。ご了承ください。

カンタータ第 36 番 《喜び昇れ いと高き星に》冒頭合唱の独創性

大村 恵美子

喜んで舞い昇れ、高く輝く星々に向かって、
汝ら、いまシオンで喜び歌う舌たちよ！
だがとどまれ、その歌声が、
遠くのかなたに拡散してしまわないように！
主みずからが、汝らのもとに近づいて来られるの
だから。

これが冒頭合唱の歌詞の直訳である。元来ある人の誕生日祝賀用に作られた作者不詳のこの歌詞は、その起源に性格づけられているせいもあって、通常のクリスマスの観念 — 天の父なる神から遣わされて、そのひとり子が人となって地に降る — からは自由に、神のみわざをほめたたえる地上の歌声が、逆に天空に向かって上昇し、宇宙の無限のひろがりの中で、かなたからこちらを目指して近づく栄えの主と遭遇する、という、じつに壮大な宇宙的ドラマをあらわしているのである。

私はここで、ベートーヴェンの第 9 交響曲にとり入れられたシラーの〈歓喜の頌〉を思い出さずにはいられない。

「兄弟たちよ、あの星空の上には／きっと愛する父が住むのだろう。／君らはうち伏し跪くのか？ 幾百万の人々よ、／創造主を予感するのか？ 世界よ、／この者を捜して行け、星空の彼方へと！／あの

星々の遠い彼方には、きっと愛する父が住むのだろう。」（小磯 仁氏訳）

地上に佇み、神から遠くへだたって、懐疑のうちに広大な星空を仰ぐ孤独な人間の姿が見える。これに対して、BWV36 の詩では、すでに神と人との恵みの出会いの場である宇宙まるごとの直観が確立している。どんなに遠くはなれていても、確実に迎えられる、神の意志がある。

音楽も、この詩の心を体して、前衛的な、休符多用の非連続的音進行にみち、不可思議の相を呈するが、とびかう多様な動機も、虚空に消散することなく、整然とした構成のもとに、もろともに上昇していくのである。

オーボエ・ダモーレ 2 本と弦合奏だけの簡素な楽器法と合唱とで、バッハは、人間をとりまく宇宙の深玄さを、端的に明るく啓示してくれる。彼の全カンタータの中でもとりわけて現代的なものではないだろうか。

本年 12 月の第 90 回定期演奏会では、「クリスマス・オラトリオ」の前半、第 1 部から第 3 部までを演奏することになりますが、それに先立ち、この待降節のカンタータ「喜び昇れ いと高き星に」BWV36 を演奏します。ぜひお楽しみに。

I Have A Dream (私には夢がある)

森泉 百合子（後援会員）

野尻湖・神山教会演奏会の帰路、大村健二・恵美子ご夫妻が、私どもの小諸の小屋に立ち寄ってくださいました。後援会員の小杉様が（私の娘・菅原昌子—合唱団員—も同乗して）お連れくださったのです。

演奏会場から抱えてきてくださった花束の、白百合の凜とした香りを夏の思い出として、信州の今朝は毛糸を着るほど冷え込みました。昼ひなかも、庭の草むらではコオロギが鳴きしきっています。

ところで昨夜、私はとてもおもしろい夢を見ました。

— まず、誰かがオバケが出ると言い出したのです。あたりには妖気が漂っていました。

そのとき、偉い軍人、つまりナントカ大尉が「実

は、わたしは物資を隠匿（こっそり不正にかくす）してある」、といて、大きな樹の根方を掘り始めたのです。それを見て、私どもも一生懸命掘り始めました。なんと出てくるわ、出てくるわ。何がでしょう。ゴツゴツして、水々しい、大っきな、おいしそうなジャガイモ!!

それを小袋に入れて、そこら辺にいた小学生の耳もとに押し当ててあげると「聞こえる、聞こえる！ スンスンとジャガイモの芽の伸びる音だ」と叫びました。

思わず私もまねしてみました。たしかに、さわやかな生長の音が高く聞こえるではありませんか。

「オバケだと思っていたのは、実は、この音のことだ

ったのね」と居あわせた一同なっとくして、一件落着。—

あのとき耳もとで聞いた芽立ちの音は、覚めてからもずっと残っていました。とてもはっきりした夢でした。

そして次は、その夢解きです。

その数日前、「M. L. キング研究会」の夏季修養会が近くの御牧村でありました。人種の平等と人間愛を求め、非暴力抗議行動の果て、39歳で暗殺されたキング牧師。「私には夢がある、I Have A Dream」という、1963年の演説をご存じの方は多いでしょう（私は初めてその原文を見せてもらいました）。その夜は同室の方々と、現今の国家状況を憂えて深夜に及びました。帰りには上田の「無言館」に立ち寄りしました。そして、また小諸の「懐古園」に入りました。樹齢500年というクスノキに頬を寄せ、「水の流れている音だ！」と、誰かが大声を出しました。

それからまた、夢を見た前日には、「原爆の図丸木美術館」で、あのボロくずとなった人々の姿を見て、本当にめまいをおこし、とうとう1階は見ずじまいで帰宅しました。

これで夢解きはおしまいです。が、なんと私の感じたことのすべてを取りこみ、圧縮した、辻褃の合った夢かと驚いています。ジャガイモが出てきたのは、私の畑を「山谷農場」と名づけ、東京の路上生活者のために、ジャガイモ、玉葱、米などを炊き出し用に送っている関係でしょう。

庭先には、ピンクのコスモスの群れが幻のように

言を添えて返信をお寄せくださいました。

創立以来のおつきあいといえば、もう40年近くになり、人生のほぼ全面にわたる期間にあたります。個人の年賀状のやりとりでも、これほど長期間というのは、そう多くはないでしょう。

最近、古い楽譜にはさまっていた月報を見つけ、その中に1994年に他界なさった、私の楽理科の卒

揺れています。けれど間もなく、コスモスも、百年経ったこの父祖の隠居屋であった小屋も消えるでしょう。「大地の家」が建つ筆者。建設予定地の前で(小諸)られない、やさしくなければ、という、さだまさしの歌が好きだという言葉を私に刻みつけて、ひとりでさっさと行ってしまった兄・澄雄の再生を祈る家です。キリスト者、その他すべての人の研修の場に、農業ボランティアの宿泊に、心疲れた人のいこいの空間に、地域のおとしよりに給食サービスもしたい等、抱えきれない夢を育てています。ジンジンと耳を聳する静けさのなかで、ただ主イエスのあわれみの声を聞いています。

バッハ合唱団の夏の演奏会についても、もう一つの夢、小さいけれど、こちらはほんものの夢の芽を、そっと育てています。またいずれ—

団友・後援会員・団員の名簿整理にあたって

大村 恵美子

合唱団創立40周年という節目を、来年迎えるにあたり、名簿の発行にも着手しはじめました。お一人ずつへの事務的問合せに、多くの方々が、暖かい—



「バッハ合唱団のクリスマス・オラトリオを聴いて

バッハ合唱団のゆるぎない歩みに感服します。いつの日にか本当に仲間に入れていただくことになり得れば仕合せと思っています。

モーツァルト、シェリング、キェルケゴール、ニーチェ、K・バルト、ハイデッガー、道元の線でバッハに行き当たれるかどうか、希望はありますが。」

(1978年2月、月報No. 188)

何ごとにも進取的な野村先生でいらっしやいましたが、この願いはついに実現には至りませんでした。

が、学生時代からの私が、このように熱い関心を寄せてくださった、多数の指導者・先輩を、創立当初から合唱団の団友・後援会員にお迎えできたことのしあわせは、現在にまで及んでいます。

その交流も、40年の歳月で、変化をこうむることにもなりました。私は、どんな場合にも、人との出会いとその交流は、死ぬまで、と信じているのですが、現実には、「もう年をとって外に出ることもなくなり」「この機会に、これまでのことに感謝し、合唱団の前途の発展を祈りつつ」名簿掲載を辞退します、というごあいさつをいただくこともふえて来ました。

合唱団としても、こんなに長い間、曲折も多かった私たちの道のりを、見守りながら共に歩んでくださった、心広き方々に、心からの御礼を申し上げて、お別れしたいと思います。ほんとうにありがとうございました。

また今後とも合唱団との交わりを続けてくださる方々には、また新たなお気持ちで合唱団の前途のなりゆきを、たのしんで享受していただけるよう、努力を重ねてゆく所存でございます。名簿は、なるべく早い機会に、皆様におとどけできますよう、目下作業をすすめているところです。

原子力発電の技術に関わる者の立場から一言

大塚 剛宏（後援会員）

月報第469号(2001年8月)の大村先生による「本の紹介」-『循環型社会』を問う-について、原子力発電に関係した仕事に就いていることから、この技術にまつわる社会的な関係論には関心があります。

エネルギーについて考えるとき、現在の状況の中でまず私達(国民)が「人間の理性」を働かせて選択しなければならない問題は、「エネルギーの使い方」、言い換えれば「生活の質に対する合意」ではないか、と常々思います。どこまで生活の利便性を求めるのか、更に言えば物質的充足から生活の質的充足への転換とその満足レベルを合意すべきではないか。家事の電化やエアコンの普及など電気漬けの生活を今後も推し進めるのか。今後も「成長」と「拡大」を指向するのか。これらはエネルギー消費量に直結する問題になります。

「原子力発電」に対する現在の私の考えを要約すると、次のようになるかと思います。

- ・今後の日本はこれ以上エネルギーを必要としない定常化した社会を希求すべきではないか。
- ・「原子力発電」は原子エネルギーの平和利用法として十分社会に貢献している。
- ・地球環境問題を考えれば、今後は「化石燃料火力発電」(石油、石炭、天然ガスなど)の規模を一定レベル以下に保ち(※)、それに代わる低コストの発電システムを開発していく必要がある。
(※化石燃料の使用を全面代替することは実質的に無理です。地球環境問題との調和レベルを求める必要があると思っています。)
- ・その有力な候補として、今後は新エネルギー開発、自然エネルギー利用(水力、風力、波力、地熱など)、分散型電源(太陽電池、燃料電池、MGTなど)、更に重要な省エネルギーといった分野の技術を開発していく必要がある。
- ・「原子力発電」は、そのような技術が普及するまでは重要な電源である。

原子力は20世紀が生んだ偉大な発見の一つですが、「原爆」という不幸な出生(利用)から始まったために特に日本人には受け入れがたい感情を誘起します。学生時代に原子力工学を志した時を思い出します。一度手に入れた「技術」は抹殺できません。パンドラの箱を空けてしまったのですから。それなら「原子力発電」という平和利用を進めて人類に貢献できる技術に育てれば良いと思いました。

事はそれほど単純ではありませんでしたが、どんな技術も最後は、作る又は使う人(国)の理性・英知に依存して毒にも薬にもなります。それが技術の宿命です。技術の使い方を誤らないよう監視する責任が生じます。

前号「本の紹介」から感じたことをお伝えしたく、お手紙をいたしました。皆様によろしく。

(了)